



この新聞は、財団法人 河川環境管理
財団の助成金を受けてつくられてい
ます。2001. 8作成

小川にて ～新治ラリー～



今年の6年生は新治市民の森を中心にラリーのコース設定をしました。ラリー当日、私は見晴らし広場で待っておりました。ほとんどのコースは市民の森が中心でしたが、川の生き物の魅力を知っている私は見晴らし広場でのチェックが終わると池ぶち広場へ急行しました。池ぶち広場のそばの小川には秋に落ちた枯葉がたくさん積み、その上を透き通った水が緩やかに流れていました。小さな網で枯葉をかき混ぜると水の中では土が舞い、濁ったその中からおもしろいようにホトケドジョウがとれました。

そのうち、にぎやかな声かして子どもたちが近寄って来ました。「何しているの。」と興味深気に聞きました。一緒にやってみようとする子は少なかったのですが、何人かがチャレンジしました。しかし、思うようにとれません。……初めはなかなかとれないの。川でいっぱい遊んでいるうちに上手くとれるようになるのよ。……私は優越感に浸りながら子どもたちにもっと川で遊んでもらいたい、川も森もあって新治は本当にいいところだと思っていたのでした。

新治小学校 山口文世



今後の活動予定

いままでの協議会の活動をまとめながら、これからの協議会のあり方や活動計画を考えるプロジェクトが、昨年12月から今年の3月まで5回開催され、PR用の「梅田川・水辺の楽校協議会のご案内」パンフレットが作成されました。

今年は、このパンフレットを活用して多くの方々に協議会を知っていただき、流域の自治会、学校・PTA、市民団体、多くの市民のみなさんに協議会活動に参加していただけるようにしたいと思います。谷戸田再生計画は、これからも田の草取り、水抜き、稲刈り、はさ、脱穀まで作業が続きます。

7月21日(土)には、新治市民の森愛護会と共催で、遊び(作業)を通して森や川の将来を担う子どもたちを育てること。また、住民自らが、地域の自然環境を維持管理していくことを考える場となるよう「子ども川と森の日」を開催しました。

9月15日(土)には、梅田川の利用、生き物との共生を考えるための「エリアマップ」や、梅田川を魅力ある川として、維持管理していくことができるような「マニュアル」づくりをするため、森・川・水田など流域の貴重な自然環境を歩いて見聞きする、ウォーキングを開催します。

11月には、田んぼの収穫祭と合わせて、恒例の「梅田川をまるかじり」を開催します。



編集後記

里山再生プロジェクトもはじまり協議会の活動も新たなステージに入ってきたと思います。私も小学生の頃、梅田(通信衛生基地付近)で親戚達大勢で田植えをしに行きました。もちろん私はメダカを取りに行っただけですけど、その頃は農薬の影響がまだ無かったのか、バケツいっぱいメダカをとって家に持って帰った思い出があります。

もう、あれから30年たちます。三保町もその頃は田んぼばかりで、ザリガニやゲンゴロウやヤゴがいっぱいいました。それに春にはレンゲが一面に咲いていたことを思い出します。ほんとうにのどかで、子どもたちの遊び場はいっぱいありました。それから四半世紀たったら、この梅田川流域が横浜でも貴重な場所になってしまうとは想像もつきませんでした。

結局、都市化が進んでしまった横浜で奇跡的に残ったこの地域をどう人々が残していくかが今後の課題です。どうやって未来の子供たちへつなげるか、都市計画、教育、税制、農政ひっくるめて考える時が今、来ているのではないのでしょうか。アスファルトの上では生物はけっして育ちません。単なる里山ブームで終わらしてはいけません。三保町、新治町等流域のみなさん積極的に関わってくださることを願っています。(横浜市全体の航空写真を見ますと、もう緑が残っているのは金沢区の円海山付近と緑区のこのあたりだけなのです。)また、現代社会において人との関りがますます希薄になりつつある中、きっと水辺の楽校協議会の果す役割は今後、大きくなっていくでしょう。

杉崎由直



梅田川 水辺の楽校新聞



テレビ報道された「どじょっこ引越し大作戦」と水辺の楽校

NHK首都圏ニュースは、魚取りの網を手にした子供たちが次々に土手を下り、春なお遠い2月の梅田川に勢揃いするところから始まりました。

「水辺の楽校協議会」メンバーや世話役の河川設計課の方々、ホトケドジョウが絶滅危惧種であることを説明する環境保全局の方々の姿もテレビ画面に登場しました。平成13年2月22日に行われた「どじょっこ引越し大作戦」はNHKのほかTVKのニュースや朝日、読売、神奈川などの新聞でも報道されました。

杉沢堰を残す河川改修工事によって、そのすぐ下流で生息する魚たちに生存にかかわる影響があるのではないかと考えた子供たちは、12年秋に一時避難させるつもりで、ホトケドジョウ・シマドジョウ、タモロコ、オイカワなどを採りまくり、それを梅田川の水草や石を入れた水槽で飼い始めました。(梅田川水族館)

そんな子供たちの気持ちを生かそうと「水辺の楽校協議会」が、工事開始直前に本格的な川ざらいを計画したのが「どじょっこ引越し大作戦」だったのです。

子供たちにとっては、楽しいだけでなく、故郷(ふるさと)意識や自然を大事にしよとする気持ちを育む体験となりました。

発足4年目の「協議会」です。イベント活動も「谷戸田再生ボランティア活動」「子ども川と森の日」「梅田川をまるかじり」と豊富になっています。梅田川流域を子供たちの遊びの場、学びの場とするための活動をますます充実させるとともに、我々大人も自然を大いに楽しんでいきたいと思ひます。

梅田川水辺の学校協議会会長 三浦和弘



プロジェクト会議の主旨

プロジェクトの経緯と内容

梅田川は、国土交通省(建設省)が平成10年度に新規施策として創設した「水辺の楽校プロジェクト」に神奈川県第1号として平成10年6月11日に登録されました。その後、ワークショップの場で、学校や市民の方々と一緒に改修工事の計画案を検討していただき、一本橋メダカひろば～念珠橋まで改修工事を進めてきました。

このプロジェクトの特徴は、水辺が子どもたちの自然体験の場、遊びの場として活用されるような地域が連携していく仕組みをつくること。河川改修工事にあたり、自然環境あふれる安全な水辺を創出するような整備計画を策定することです。

協議会の活動目的

「梅田川水辺の楽校協議会」は、梅田川とその流域の自然を大切にしながら、人々が集い憩える場として、また、体験・学習の場としてこの自然を活用しながら、子どもたちの健やかな成長を支え育むことを目的としています。谷戸再生計画について

協議会の場で、新治自治会長の仲丸さんから、「新治の素晴らしい景観でもあり、梅田川の多様な生き物が生息できる環境となっている谷戸田の保全が大切だ。休耕田となってしまっている田を再生しよう」と提案をいただきました。農家の方々の協力もいただき、「田んぼお助け隊」としてボランティア活動を4月からはじめ、6月3日には田植えも終わりました。



先生と生徒で田おこしのお手伝い

目次

「どじょっこ引越し大作戦」と水辺の楽校	1
プロジェクト会議の主旨	1
田んぼお助け隊長のお話し	2
地元農家、加藤さんちのお話し	2
田おこし・畦づくり・田植え	3
みなさんの感想	3
小川にて～新治ラリー～	4

ハイライト

- ◆ プロジェクト会議の主旨と今後の活動予定
- ◆ 谷戸再生プロジェクト〈田づくり講座〉がスタート
- ◆ お天気にも恵まれた新治ラリー



田んぼお助け隊・隊長金子さんのお話し



新治市民の森愛護会が活動を開始して早1年が経過し、会員の努力により昔の里山が復元できる希望が見えて来る中で、むかし遊んだ田圃が無くなって行くことが、ますます気になっていました。里山と共に水田に保水された豊かな水が流れる梅田川に魚や水生昆虫が多くいたのが、昔の新治の自然です。

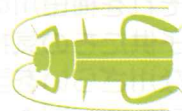
私の子供の頃、春の田では「たにし」を拾い集め、ゴボウと煮込んで美味しく食べ、田植えの頃には、大きなはさみを持った真っ赤なアメリカざりがにがデンと構えているのを棒でつつき、泥を巻き上げ後ろ飛びするのを楽しんだ。水路にはメダカが泳ぎ、畦の水路の段差がある場所には、ひげを出した黒い大きい頭の面白い姿の魚（ゲバチと言っていた）を見ることができました。

また、田植え後の水が澄んだ田には眠っている「どじょう」が良く見え、夜、赤松の根を「たいまつ」にして「どじょう」打ちを楽しめた。この頃、飛び交う蛭を小麦の藁で編んだ籠に捕まえて、お尻が光るのを観察したが、朝見ると蛭は死んでいた。水路のメダカも手にすくい取ると、何回か跳びはねた後、すぐに死んでしまった。私達の年代は、水田生態系に棲む小動物を遊びの対象にしてきましたが、はかない命の小動物の死を多く見ると同時に命の大切さを肌で学んで来ました。

現代の青少年に、是非、この貴重な体験ができる環境を復元してあげることが必要であると痛切に感じていましたが、自分の力だけではこの問題を解決出来ず気になっていました。しかし、現在、この問題を多くの人々が意識していることも感じていました。

いつの時代にも、問題解決には確かな展望と、強烈な使命感を持ち合わせたリーダーの出現が待たれるものですが、地元で農業を営み自治会長で活躍している仲丸氏の本協議会の会議での力強い発言で、水生昆虫たちの生態系である、水田の復元作業に取りかかれたことは高く評価でき、また、地元小学生にとっても素晴らしい学習環境を提供できることとなるでしょう。是非、今後とも多くの青少年のため、ボランティア活動に参加できる人々をお待ちしています。

金子 洋



地元農家、加藤さんちのお話し

私は、横浜で仕事をしていたのに新治に越してくるまで、新治のことについては何も知りませんでした。私の新治についての第一印象は、横浜にも駅からこんな近くの場所に田舎の風景が残っている場所があるんだということでした。私も青森の田舎育ちですが、もしかしたら、私の田舎より田舎かもしれない。ただ、私の田舎と違うところは、横浜という大都市の中に田舎の風景があり、そこにたくさんの人々が住んでいることです。つまり里山は市民全体の財産であり、市民及びそこに住む人々の手で守っていくものではないでしょうか。

また、私にも去年、子供が生まれ、この子が将来に渡り里山を市民の財産として誇れる形で残していくことが、私たちの時代に出来る事かもしれないと思います。

今回、新治小学校の皆さんと一緒に田んぼの手伝いをしてありますが、私も田んぼの作業は初めてなので、こんなにも大変なものだと思いませんでしたが、田んぼの作業を通して水の大切さを肌で感じ、その水を育てている里山の大切さを改めて考える機会になりました。

そして、この場所で母の農業の手伝いをするようになり、都市近郊で農業を続けてゆくことの大変さと重要性、又、作物が育った時の喜びを知りました。これは今回の田んぼの作業で、皆さんも感じる事が出来ると思いますので、これからも一緒に頑張っていきたいと思います。

加藤日出美



さあ、金子さんのお話しを聞いて！

地元の農家のみなさん

なかなかスコップではうまくいきません

田おこし・畦づくり・田植え



横浜市全体の水田面積は約202ヘクタール、新治市民の森（指定面積約61ヘクタール）の約3.3倍です。みなさんは、この数字を見て「まだ、そんなに田んぼがあったんだ」と思いますか？それとも「ずいぶん少なくなった」と感じますか？

実は、横浜の田んぼはピンチなのです。10年前の面積と比較すると57%、5年前と比べると80%と減少し続けています。

緑区には、現在約40ヘクタールの水田があり、全区の中で青葉区に次いで2番目に田んぼの多い区ですが、減少傾向は例外ではありません。特に、人ががかり収量の上がらない谷戸田（やとだ）の保全是里山の豊かな自然を守るための重要課題です。

また、田んぼはお米を作るほかに、大雨が降ったとき水を溜めて水害から守ったり、清々しい緑の景観と空気を私たちに与えてくれます。

そんな大切な田んぼも、一旦荒れてしまうと元に戻すのは大変です。ここで、みんなが谷戸田を守るため、泥んこになり取り組んできた作業を振り返ってみます。

4月 雑草を丁寧に取り除き、田おこし（田んぼの土を掘り起こし、十分に酸素や肥料を与える作業）を行いました。田に水を引くための水路の整備も行いました。

5月 田に水を入れ、田んぼの水が抜けないように、畦（あぜ）畔（くろ）の整備をしました。くろづけ作業は、壁を塗るように、鍬（くわ）で上手に行いました。しろかき（耕運機で水と土をかきまぜ表面を平らにし、苗が植えられる状態にする）を行い、田植えの準備がととのいました。

6月 みんなの手で田植えをおこないました。

7月 田の草取りを行いました。

田植えを行った時点で一段落ですが、今後、お米がとれるまでには、水の管理、田の草取り、（カカシ作り）、稲刈り、脱穀、もみすりなど様々な作業が待っています。餅つきを楽しみに皆でがんばりましょう。

横浜市北部農政事務所 牧野 進



加藤満子さんの田植えのスピードにみんなは驚き仰天

みなさんの感想

今回、参加して下さった父兄のご感想を少し紹介します。

「見ていただけではわからないけど、手で触れる体験をして自然の良さを感じました。」

十日市場町在住 金子佳美さん（5年生のお子さんと一緒に）

「新治町にもダッシュ村があることを、まだ知らない子供たちがいっぱいいます。もっと水辺の楽校のPRをしてください。」

十日市場町在住 角田泰子さん（1、6年生のお子さんと一緒に）

田植えをやったよ 新治小 5年生

田植えをするとき、最初は手足にどろがついて気持ち悪かったけど、慣れてくると、だんだん楽しくなった。龍瞳
田植えのとき、生き物がいっぱいいたので、田んぼができたならもっと増えてほしいです。瑞穂

草刈りとか野焼きが楽しかった。田植えだけでなく、こんな作業もするんだって思った。田んぼをする人の苦勞がわかったよ。直人
米の育ち方は、ああいう段階があってきているんだなあと思いました。山内
ヒルや何かの生き物のたまごがあって、初めのうちは、なかなかやる気が起こらなかった。でも楽しかった。聡史



よく聞いてね！



さあみんな田植えだ



お母さんと一緒に